

総合型地域スポーツクラブにおける障害者受け入れの現状と課題

山本周平

キーワード:総合型地域スポーツクラブ、障害者、人材養成、財源確保

I. はじめに

総合型地域スポーツクラブ(以下、「総合型クラブ」)は、スポーツ振興施策の一つとして2000年から普及が始まった。総合型クラブとは、人々が身近な地域でスポーツを楽しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで①多世代、②多種目、③多志向という特徴を持ち、地域住民により運営されるスポーツクラブをいう。2012年現在、全国で3048のクラブが設立されているが、障害者の受け入れを行っているクラブは20%未満にとどまっている(山田, 2009)。

これまで総合型クラブを対象として実施された研究では、指導者養成や会員、活動拠点施設、クラブハウスおよび、活動財源の確保、行政との情報共有などが課題として挙げられてきた。しかし、障害者の受け入れの現状およびその課題については十分に明らかになっていない。誰もがスポーツを楽しむという総合型クラブの理念を達成するためには、障害者の受け入れの現状と課題、受け入れにおける阻害要因を明らかにする必要がある。

II. 目的

本研究では、障害者の受け入れを行っている総合型クラブのサービスの現状とその課題、受け入れを行っていないクラブにおける受け入れの阻害要因を明らかにすることを目的とする。

III. 方法

本研究は、2012年12月～2013年1月、T県K市において、障害者の受け入れをおこなっている総合型クラブ(以下、Sクラブ)と受け入れを行っていないクラブ(以下、Tクラブ)のスタッフを対象としたインタビュー調査により回答を得た。

IV. 結果

①障害者サービスの現状(Sクラブ1週間の事例)

クラブ会員の総数は、約600人であり、そのうち障害者は、約200人であった。その多くが知的・発達障害であった。健常者を対象とするプログラムは、バスケット、バレー等の室内スポーツが中心であり、週6回、市内3か所の学校で実施されていた。一方、障害者を対象とするプログラムは、1コマ50分で、平日に1回、土曜日に3回、市内4か所の学校で実施され、全体のプログラムの4割

を占めていた。障害者を対象とするプログラムでは、縄跳び、ボール遊び、跳び箱、マット運動、鉄棒、水泳等が実施されており、活動の多くは障害者専用の道具を使用せずに実施されていた。また、視覚、聴覚障害者などを対象とするプログラムは用意されていなかった。プログラム内では、障害、スポーツの双方に対する専門性を持つメイン、アシスタントコーチが各1名、専門性を持たないボランティアが数名指導しており、健常者を対象としたプログラムよりも多くの人数で指導をしていた。また、プログラムに参加することは保護者にとっても数少ない情報交換の場となっていた。

②障害者サービスの課題(Sクラブの事例)

指導者の数が慢性的に足りない現状があり、指導者養成が課題として挙げられた。また、財源の確保も課題として挙げられた。これは、十分な財源がなければ高額な障害者スポーツ専用の用具を揃えられず、障害の種類によっては障害者を受け入れることができないためである。

③障害者受け入れの阻害要因(Tクラブの事例)

現在、障害者の受け入れを行っていないクラブでは、阻害要因として、障害・スポーツの双方に対する専門性を持った指導者の確保が難しいこと、限られたクラブの財源では、障害者スポーツ専用の用具を揃えることが困難であることが挙げられた。

V. 考察

今後、障害者の受け入れを推進するためには、スポーツ指導の技術に加え、障害に対する専門的な知識をもった指導者の確保が必要となる。そのため、行政が主体となり、障害者センター等の専門機関との連携を図り、人材の派遣や養成のシステムを確立することが効果的であると考えられる。また、障害者スポーツ専用の道具を使用しないプログラムの充実を図れば、財源の課題も克服することができ、障害者の受け入れを推進することができると考えられる。

VI. 結論

今後、障害者の受け入れを推進するためには、障害・スポーツの双方に対する専門性を持った指導者の確保が課題として考えられた。また、財源確保のシステムを強化しつつ、障害者スポーツ専用の道具を使用しないプログラム作り等を進めていくことが課題となると考えられた。